

第21回「チーム新・湯治」セミナー [東京現地会場+オンライン配信]

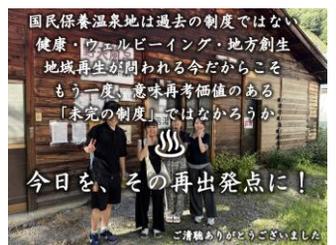
国民保養温泉地における『新・湯治』の実践に向けて

環境省では、第21回「チーム新・湯治」セミナーを令和8年1月27日に開催しました。国民保養温泉地は、温泉法に基づいて国民の保健休養に重要な役割を果たす温泉地を環境大臣が指定するもので、現在79カ所が指定されています。国民保養温泉地は、自然環境、まちなみ、歴史、文化等の観点から保養地として適していることから、「新・湯治」の実践の場として中核的な役割を果たすことが期待されています。一方で、その趣旨や魅力が十分に国民に知られておらず、その機能が十分に発揮されていないといった課題があります。今回のセミナーでは、近年のインバウンドの増加や、「温泉文化」のユネスコ無形文化遺産登録への動きも踏まえ、国民保養温泉地における「新・湯治」の実践の状況や課題、今後の方向性を整理し、国民保養温泉地の活性化に向けたヒントを探りました。

講演 国民保養温泉地の現状と課題

小堀貴亮 氏 (杏林大学外国語学部観光交流文化学科 教授)

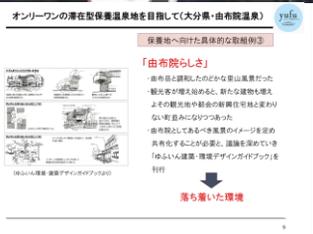
- 温泉地の発達過程として、1885年当時は湯治場として長期滞在し疾病の療養を行う療養温泉地が100%であったが、徐々に保養・レジャー、歓楽・娯楽的な意味合いを持つようになり、保養温泉地・観光温泉地に発達していった。1990年には約9割が観光温泉地となり、療養温泉地は全体の4%程度（約120箇所）になった。こうした機能変容を踏まえ、「現代版湯治場」という概念を提唱し、また環境省でも「新・湯治」の取組がスタートした。これによって、観光温泉地化した温泉地も現代の新しい湯治場として再定義され、温泉地の原初体に回帰している（温泉発達の輪廻）。
- 「新・湯治」の核となるのが、国民保養温泉地である。選定基準は、泉質・湧出量・自然環境・歴史文化・医療・衛生管理・災害対策など、厳しい基準が設けられている。国民保養温泉地は現在79箇所が指定されているが、選定基準や計画の見直し、5年ごとの温泉地計画の見直しなどによってハードルが上がり、数が減少している。また、国庫補助制度が廃止されるなど、指定されるメリットが見出せないということも理由として考えられる。
- 直近で実施した国民保養温泉地に関するアンケート調査では、「よく知っている」と回答した人は6.2%にとどまった。また、イメージとしては「信頼感がある」「健康になれそう」というものから、「堅苦しい」「古臭い」などのネガティブなものも挙がり、認知度やイメージの改善が課題である。
- 今後は国民保養温泉地のコンセプトを再定義し、「癒し」「整う」「リセット」など、サウナやウェルネスと結びつけて発信してはどうか。また、若者に刺さるキャッチコピーやネーミング戦略、公式英語表記などを検討し、世界に発信していくべきである。健康・ウェルビーイング・地方創生・地域再生が問われる今だからこそ、もう一度その意味を再考する必要があるのではないか。



事例発表1 オンリーワンの滞在型保養温泉地を目指して (大分県・由布院温泉)

生野敬嗣 氏 (一般社団法人由布市まちづくり観光局 事務局長)

- 由布院温泉は、かつて「奥別府」とも呼ばれ、隣接する別府温泉への観光客が足を伸ばして訪れるだけの特色のない田舎の温泉地だった。ただ、当時から自然が一番の観光資源と考え、自然保護運動を続けており、この運動の中でまちづくり運動が始まった。特に、視察を行ったドイツのバーデンヴァイラーという町のまちづくりや日本初の林学博士、本多静六氏の講演によって、由布院温泉が目指す保養温泉地としての方向性を見出した。
- 保養温泉地へ向けた具体的な取組としては、「歓楽街のない温泉地」を守り、当時主流だった男性の団体旅行ではなく、女性の個人客をターゲットとし積極的に受け入れた。また、「アーバンな田舎まち」「上質な宿」をキーワードに、それぞれに個性があり、由布院でしか体験できない空間づくりを大切にしてきた。また、町全体としても、景観や建築に関するガイドブックを刊行し、由布院らしさ（由布岳と調和したのどかな里山風景）を守り、落ち着いた環境を整えながら保養温泉地としての空間づくりを行っている。さらに、由布市としても健康・保養に力を入れており、温泉プールを用いた健康増進プログラムやウォーキングプログラムを開催し、健康立市としての取組も行っている。
- また、由布市内には主に5つの温泉（由布院・塚原・湯平・庄内・挾間）があり、それぞれ異なる特徴を持っている。どうしても由布院が目立つことが多いが、市内に様々な温泉が湧いているという特徴を強みにできないか、模索している。
- 由布院温泉のインバウンドの現状としては、コロナ以降急激に増えており、一昨年には過去最高を記録した。ただ、宿泊客も伸びてはいるものの、圧倒的に日帰り客が多く、そのほとんどが福岡や別府からの団体バスツアーの方々であり、温泉に入らずに帰ってしまうという課題がある。



事例発表2 酸ヶ湯温泉における湯治文化継承について 高田新太郎 氏（酸ヶ湯温泉株式会社営業企画室 係長）

- 酸ヶ湯温泉は、1683年に発見された温泉で、1954年に国民保養温泉地第1号に指定された。メインは大浴場「ヒバ千人風呂」。宿泊客全体の9割が日本人で、インバウンドはねぶた祭、紅葉、樹氷、桜の時期に集中しており、温泉を目的に来ている人は少ない。そのため、ヒバ千人風呂や館内の案内をしなが、「湯治文化」や「混浴文化」について紹介している。また、本物の湯治を知ってもらうためには、まず日本人に来てもらう必要性を感じている。
- ヒバ千人風呂は混浴だが、女性の方は入りづらく、実際に入浴しているのはほとんど男性という状況だったため、令和3、4年には「10年後の混浴プロジェクト」を実施し、湯あみ着の無料レンタルを行った結果、普段入らなかった女性の方たちにも入っていただくことができた。これを受け、現在は湯あみ着のレンタルを常設化し、より多くの方に楽しんでいただけるようになった。
- 湯治に必要な要素は、「温泉」「自然」だけでなく、「人的交流」も重要だと考えている。そこで、自動チェックイン機の導入を中止し、お客様と接する時間を大切にしている。
- 以前はウィンタースポーツをする人だけが雪山を楽しむことができると思っていたが、それ以外の人たちも駐車場に積もる雪を見て喜んでる姿があり、自分たちには当たり前の日常や魅力と感じない部分にも、訪問者が魅力と感じるところがあると気づき、そこに注目した様々な企画を行っている。極寒座禅会という企画に参加した方からは、雪の降り積もる音や遠くの人話の音が聞こえたという予想していなかった反応があった。この経験から、魅力とは認識されていない人や自然環境の発する音が湯治場の風情を作っているということに気づいた。
- 湯治に必要なものは、「温泉の熱」「木のぬくもり」「人のあたたかさ」であり、湯治によって人が本来持つ感性が活性化され、それが心身の健康につながると感じている。湯治について、うまく定義できていないが、ウエルビーイングに近いと思っており、来る人も健康になり働く人も健康であればいい場所になると思っている。



講演者によるパネルディスカッション

国民保養温泉地のメリット・デメリット

- 高田氏：初めて来た人へのわかりやすさはメリットだと感じている。昔から湯治場として大事にしてきた温泉地だと説明しやすい。デメリットを感じたことはないが、国民保養温泉地というものを知らない人が増えていて感じる。
- 生野氏：指定当初は、温泉地を知るきっかけになっていたと思う。また、環境省が指定したという信頼感がある。デメリットはないが、基準が厳しくなるほど、行政や申請団体の負担はあると思う。
- 小堀氏：酸ヶ湯温泉は第一号というのをもちPRでできればと思っている。湯布院温泉は国民温泉保養地たる条件が全てそろっている。デメリットとしては、手続き面での苦労は自治体からもよく聞く。あとは認知度の低さもあり、古臭いなどマイナスのイメージを持たれてしまう懸念はあるが、両温泉地はこれらの課題にうまく対応しており、これまでの不断の努力を今後にも活かしてほしい。

新・湯治を実践する上でのポイントと課題

- 高田氏：昔ながらの湯治といっても、長期滞在ができる人は少ないので、新湯治という考え方はヒントになる。また、湯治しやすい環境を作りたいと考えている。来た人が自炊し、温泉入浴をして何泊もすること自体が湯治。この雰囲気大切にしたい。
- 生野氏：湯治というまだまだ長期滞在し療養するというイメージが残っているが、由布院でも映画祭や音楽祭を開催するなど、温泉に入った後の楽しみ方を提供してきた。国民保養温泉地としての伝統も守りつつ、温泉だけではなくその土地ならではの過ごし方を含めて、新・湯治という形でイメージを変えていきたい。
- 小堀氏：新しい湯治ということで、湯治の再定義がこれから求められるのではないかと。

国民保養温泉地としてのインバウンド対策

- 生野氏：我々は当たり前のように温泉を利用しており、温泉というものをなんとなくは理解しているが、外国人に対しては言葉や文化が違うからこそ、温泉文化というものをよりしっかりと伝えることが重要だと考えている。
- 高田氏：現在はアドベンチャートラベルを考えていて、外国人に対しては、湯治をしながら文化体験や食を楽しむことはプラン化できると考えている。最近ではリピーターが増え、昔ながらの湯治をしたいという外国人の方も少しずつ増えているので、時間をかけて取り組んでいきたい。
- 小堀氏：言葉の問題もあるが、言葉では伝えられない温泉の神髄・雰囲気伝えることも大切になってくる。また、酸ヶ湯のような取組がモデルケースとなることに期待したい。

国民保養温泉地認定のハードルについて

- 国民保養温泉地に認定されるまでの一番のハードルはなにか。
- 高田氏：地域の歴史・文化・自然などを熟知した語り部のような存在は必要だと思う。
 - 生野氏：地域合意という点では、名称をどうするかという議論があった。
 - 小堀氏：行政だけで進めるのは難しいので、地域の歴史、文化、自然などに精通している専門的な人の協力は不可欠。また、住民の方あつての地域。100%の合意は難しいが地域、観光客に浸透させる作業がまず重要になってくる。

その他（質疑応答）

- 湯布院温泉郷には、様々な温泉があるが、その中で機能の差別化はしているのか。
- 生野氏：現代において、湯治を定義することは難しいが、それぞれの湯治、温泉地の個性をうまく整理できないと、一般の方には伝わりにくい。そこをうまく整理できれば、その人に合った湯治の提案など、様々な活用ができるかもしれない。
 - 小堀氏：情報発信が足りないとの指摘もあったが、適切な人にしかるべき情報を伝えることが必要となる。由布院温泉のような規模の大きい温泉地であればなおさら大事になってくる。

